

縫製における布の縫いべりにつりマ
相模女大家政 永井房子 ○田中百子

目的 規格サイズに適合した衣服を製作するためには、パターン・縫製技術など種々の要素が考えられる。衣服を製作する場合、各ピースを縫合してひとつの型に作り上げるが布地を縫合することにより各ピースの巾がせまくなり出来上がった衣服が規格サイズより小さくなることをしばしば経験する。特に厚手の布地において顕著である。これは縫合によって生じる縫いべりによる結果と思われる。そこで前回、布地の厚さ、方向、針目数、縫い目本数の違いによる縫いべり分量につりマ実験を行ない報告した。今回は衣服の素材として使用される人工皮革を用いて、布地の厚さ、方向、針目数、縫い代の始末などの違いによる縫いべり分量につりマ実験を行った。

方法 試料布として厚さの異なる市販人工皮革4種類を用いた。縫製条件は試料布を中表2枚重ねとし、布地の縫合方向はたて、よこ、45°バイヤス3方向、針目の大きさは $\frac{8針}{cm}$ 、 $\frac{4針}{cm}$ 、 $\frac{2針}{cm}$ の3種類、縫い代の始末として縫い目割り、片返し の2種類、縫い糸はポリエステル糸60[#]とした。ミシンは一般家庭用本縫いを使用した。

結果 縫いべり分量は布地が厚くなるほど大きくなる傾向を示し、布地の方向においては大きな差はみられない。針目においては $\frac{8針}{cm} > \frac{4針}{cm} > \frac{2針}{cm}$ となり1cm当りの針目が小さくなるほど縫いべり分量は大きくなる傾向を示した。縫い代の始末では縫い目割りよりも片返しの方が縫いべり分量は大きくなる傾向を示した。